

アメリカのキリスト教ナショナリズムとの出会いと葛藤

- リベラル派のメノナイトの模索 -

中朋美

Facing American Christian Nationalism:
A Case Study among Liberal Mennonites

NAKA Tomomi*

キーワード：キリスト教ナショナリズム，アメリカ，メノナイト，モラルティイー

Key Words: Christian Nationalism, United States, Mennonites, Morality

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行となった2020年は、多くの国や地域や人々にとってさまざまな変化や課題を感じさせる1年であった。中でもアメリカでは、4年ごとに実施される大統領選挙が行われ、社会動向に注目が集まった。そしてパンデミックが続く中、2021年1月にアメリカ合衆国連邦議会議事堂襲撃事件が起こり、アメリカ社会における多様な意見のせめぎ合いがより明確に浮かび上がった。そこでの意見の対立は、単に政治的な対立だけではなく、多くの文化的、宗教的なイメージやレトリックが組み込まれ、より深い文化的・社会的な分断を感じさせるものであった。

この論文ではそのような分断や対立と関係するキリスト教ナショナリズムの流れに危機感を感じ、その対応を模索しているメノナイト教派の教会員の様子を考察する。一般に、近年のキリスト教ナショナリズムやその共感者に見られる思想や運動は、ここ数年にアメリカで登場したものでもなく、その歴史的なルーツはさまざまなおとこで見られるとされる（たとえば Bjork-James, 2021; Butler, 2021）。しかし新型コロナウイルス感染症によるパンデミックや大統領選挙によって、キリスト教ナショナリズムの存在がより明確な形でメディアに登場することとなった。それを受け、キリスト教ナショナリズムの共感

者の動向が研究され、注目をあびている。しかしその一方、キリスト教ナショナリズムの動きに反発する人、同調しない人も数多くいる。ここではそういった人々の対応について、モラルや倫理に関する人類学的な視点を参考としつつ、異なる意見への対応を考察していく。

II. アメリカにおけるキリスト教ナショナリズム

キリスト教ナショナリズムという言葉の意味やその定義はさまざまなものがあるが、一般的にキリスト教と政治や政策を深く結びつける思想や動きとされる。その中でも特に国家としての統一や発展に関連する政治において、キリスト教の解釈、儀礼、儀式などの宗教的要素を取り組んだ思想やそれを擁護しようとする運動を指す (Stewart, 2020; Whitehead & Perry, 2020)。例としては移民や非白人といった人種的なマイノリティーに対する政策議論で巧みにキリスト教が組み入れるような場面などがある。アメリカの歴史では、キリスト教がさまざまな政治的な動きに組み入れられてきた例は古くからある。ヨーロッパからアメリカにやってきた初期の入植者がネイティブ・アメリカンの人々に対して自分たちの立場を正当化する際や、奴隷制度、その後の人種差別的な政策の実施の際に、聖書の話やイメージを用いた

*鳥取大学地域学部地域学科

例などである (Bjork-James, 2021; Butler, 2021; Du Mez, 2020)。概して、政治とキリスト教が深く結びつけられる時には、現状を維持する保守的な立場からなされることが多い。しかし、時には 19 世紀後半から 20 世紀ごろに盛んとなった社会的福音運動のように、広く多くの人にとってより公平な社会を目指したものもある。このように、信仰を行動で表すにあたって、政治とのかかわりがある程度持つことは避けられない場合もある。しかしキリスト教が一部の社会的、経済的弱者の抑圧といった政策のサポートとして組み込まれている際には、特に慎重に検討が必要である。

1980 年代を中心として活躍したモラル・マジORITY、1990 年代に勢いがあったキリスト者連合にみられるように、アメリカでキリスト教と政治とのかかわりがメディア等で取り上げられたことは過去にもある。近年では共和党との深いつながりが指摘されることが多いが、常にそうであったわけではない。たとえば、Du Mez (2020) はキリスト教の団体が政治とのかかわりを深く持つようになった経緯を民主党、共和党両面から詳細に考察し、その特徴を述べている。

時代によってキリスト教ナショナリズムのあらわれ方にはさまざまあるが、多くの研究では一般的に男性の強いリーダーシップと女性の補助的な役割の強調が指摘されている (たとえば Bjork-James, 2021; Du Mez, 2020)。また Bjork-James (2021) や Butler (2021) が指摘しているように、キリスト教のレトリックを組み込みながら、人種間の関係、特に白人と非白人の不平等な立場があるべき姿だとして解釈されていることも多い。

キリスト教といっても多様なグループがあり、その多様性とキリスト教ナショナリズムとの関係も複雑である。アメリカ社会では、WASP (White Anglo-Saxon Protestants) という表現にあるように、しばしばプロテスタント系のキリスト教が中心的な存在であるとされていたことが多い。しかしラテンアメリカをルーツに持つ移民の増加などもあって、現状は変わりつつある。ケネディーやバイデン大統領のように、政治やそのほかの場面で、カトリック信者の活躍も多くみられる。また現在ではプロテスタントかカトリックかどうか、さらにプロテスタントの中でもどの教派 (たとえばメソジスト教派か長老派) かどうかの違いは以前ほど大きくはないとされる。その違いよりもむしろ宗教的な価値観をどのように社会や政策に反映させるかについての立場の違いの方が、アメリカ社会と宗教との関係を考える上で重

要であるとの指摘がある (たとえば Putnam & Campbell, 2010)。そのような傾向を表す語として、保守派、キリスト教右派、福音主義派などが使われることが多い。ただそれらの言葉の意味は、使用する人によってさまざま、また時代やそのほかの文脈で異なることがある。

先に述べた研究 (Bjork-James, 2021; Du Mez, 2020) のように、先行研究ではしばしばキリスト教右派や福音主義派の人々や教会を分析することによって、キリスト教ナショナリズムへの流れを読み解こうとするものがある。しかし、Whitehead & Perry (2020) の研究にあるように、現在のキリスト教ナショナリズムを支持したり、それに共感したりする人々は、必ずしも特定の教派や信徒に限定されるというわけではない。むしろ、どの宗派にも存在すると捉える方が現状に近い。今回の調査でも、キリスト教ナショナリズムに共感する親戚、友人、隣人がいた様子を語った人があり、同じ教派や教会内でも共感者がいることがある。

広く社会に存在するキリスト教ナショナリズムの共感者や支持者の特徴として、彼らが一貫した思想を信奉しているわけではなく、むしろ文化的なフレームワークを共有しているとの指摘がある (Whitehead & Perry, 2020)。言い換えると、キリスト教の教義がまずあるというのではなく、社会や文化がどうあるべきかの捉え方がまずあって、そこにキリスト教が組み入れられ、それに共感したり支持したりする人々や彼らの活動が現在のキリスト教ナショナリズムであるとされる。このような特徴を踏まえると、キリスト教ナショナリズムの考察には、特定の教派や教会のみが深く関係していて、他の教派の信徒はまったく無関係であるとはいえないといえる。キリスト教ナショナリズムはほかのキリスト教信者との関係の中で存在している。「ほか」の人々が「彼ら」であるキリスト教ナショナリズムの支持者やその動きをどのようにとらえ、対応しているのかを考察することも現在のキリスト教ナショナリズムを理解する手掛かりとなる。

III. メノナイト教派

この論文で調査対象としているのはプロテスタント教派の一つであるメノナイト教派の教会とその教会員である。基本的な教義においてほかのキリスト教派と共通点が多い。しかしほかの教派と異なり、平和主義や信徒間の相互扶助が強調されることが多い。

メノナイト教派のルーツは 16 世紀にヨーロッパ

でおこったアナバプティスト運動にある。この運動では、当時の幼児洗礼やキリスト教会と政治との関係に反対し、自分たちが考えるキリスト教の教えを中心とした生活をおくることが強調された。当時の多くの政治・宗教的な権威は、この運動に参加した人たちを好ましくない存在として迫害を行った。そのため、この運動に参加した信者たちは、元の居住地を離れヨーロッパ各地、その後にはアメリカ大陸に移り住んだ。現在のメノナイトはこのアナバプティスト運動の流れをくむ教派の一つである。メノナイトのほかでは、アーミッシュやハテライト教派などがある。

メノナイト信者たちの一部は、18世紀ごろからアメリカ大陸に移住し始めた。彼らは一度に渡ってきたのではなく、徐々に、そしてさまざまな経由地を経てアメリカにやってきた。アメリカに渡った時期や移住までの体験の違いは、現在のメノナイト教派内の教義上の解釈やその実践の違いと関連することがある (Redekop, 1989)。なお、メノナイト教派のほとんどは、共同生活をしておらず、様々な宗教や社会的、民族的背景の人々が生活する中で、各信者が生計を立てて暮している。

一般にメノナイト教派では、信者間での相互扶助、政教分離、平和主義の立場が強調されている。これらは聖書の解釈によるもので、たとえば平和主義は、武力による強制はイエスによる教えに反するとの解釈と関連する。メノナイト教派全体の信者数は、アメリカにおけるほかのプロテスタント教派に比べ多くはない。しかしメノナイト教派の立場に基づく活動、たとえば災害支援活動や平和主義にもとづく活動などは広く知られていることが多い。

そういった共通の教義や解釈はあるものの、メノナイト教派内には多様なグループが存在する。これらのグループの違いは、聖書の教えを具体的な日々の生活においてどのように適用すべきかの異なる解釈がその背景にあることが多い。この論文では便宜上、メノナイト内の数多くのグループを、その特徴から、大きく3つに分類する。

一つめのグループは、車の所有や使用の制限、そして衣服等の日常的な活動に対する制限が最も多いオールドオーダーグループである。二つめは、そういった制限がほとんどなく、衣服等の違いではほかのアメリカ人とは区別がつかないリベラルグループ、そして中間的な存在として、コンサーバティブグループである。コンサーバティブグループでは、信者の衣服やメディア使用に制限があるものの、車の所有などが一部認められている。またオールドオーダ

ーグループとは違い、積極的に国内外の人々に伝道活動を行っている (Naka, 2008; Scott, 1996)。

これらのメノナイト内の違いは日常的なレベルでの行動や知人関係にあらわれることが多い。たとえばオールドオーダーとコンサーバティブのグループでは、子どもたちのほとんどが、各グループ関連の学校に通っている。その後の勤務先も同じグループの人々が経営、あるいは勤務しているところであることが多い。これに対してリベラルグループは、同じグループのメノナイト関連学校や団体に所属する人は一部で、職場や学校が教派とは関連が少ないという人が多い (Naka, 2008)。

しかし、グループ間の違いによってほかのメノナイト信者やそのほかの人々との関係が分断されているわけではない。多くの場合、親戚にはさまざまなメノナイトグループ、そして時にはそのほかの宗教的背景の人たちがおり、彼らを通じてほかのグループの様子を知ったり、関わったりすることがある。メノナイトのあるグループに生まれたからといって、みなが同じグループに属するとは限らない。グループ間や教派の所属は、各自の信仰による。従って、たとえば両親や祖父母の誕生会の集まりでは、オールドオーダー、コンサーバティブ、リベラルのグループの親戚がおり、会話やそのほかのやりとりがなされている。そして後でも述べるが、そういった場が聖書の教えの解釈をどのように実践的に移すかの考え方の違いの遭遇の場となることがある。

IV. モラリティー

この論文ではモラリティーをめぐる近年の人類学的な研究を手掛かりにメノナイト信者を事例としたキリスト教ナショナリズムをめぐる対応を考察する。広い意味でのモラリティーについての研究は以前からあるものの、それらは社会にある規則や倫理観としての側面を強調してきた。これに対し近年の研究では、生活において人々がどのようにあるべき姿を模索し、実践していこうとしているのかという側面に注目している (神原, 2021)。モラリティーの研究の流れにはさまざまあるが、この論文ではその中でも Mattingly (2014) や Kleinman (2007) の研究に見られるように、日常の生活が大きく揺らぐ際、どのようにあるべき姿を人々が模索するのかについて注目しながら、考察を進めていく。具体的には、メノナイトの人々が、キリスト教ナショナリズムやその支持者についてどのように接し、対応すべきかについての様子を、日曜礼拝やその他の場面での教会員のやりとりなどを手掛かりに探っていく。なお研

究者の中には、道徳や倫理、またカタカナのモラリティーのあいだの違いを議論するものもある(神原, 2021)が、ここでは、それらにみられる区別をせず、モラリティーという言葉を使ってメノナイト信者の対応の模索を分析していく。

モラリティーを考えるにあたって、Zigon (2008)は三つの局面があると指摘している。そのひとつは教義などによる規範といった制度的なもの、二つめは、制度的には確立してはいないが、人々の言説として表現されるものである。そして三つめとして、必ずしも言語化されていないが習慣などとして身体化されたものである。ここでは、特に後者の二つに着目しながら、キリスト教ナショナリズムをめぐる意見の対立とその対応の様子をみていく。

V. メイプルストリート教会

この論文では、2020年の大統領選挙の時期における、リベラルメノナイトグループの教会員のキリスト教ナショナリズムや関連の動きへの対応を考察する。具体的にはバージニア州にあるメイプルストリート教会とその教会員の様子を分析していく。個人情報やプライバシー保護のため、教会名や個人名は偽名である。

メイプルストリート教会は、創立後約50年の教会である。教会員は約350人で、3名の牧師がいる。メノナイト教会としては比較的大きい。教会の近くに大学やメノナイト教派関連の教育機関などが複数あるため、これらの仕事に従事する人が多い。そのほかの仕事に就く人、たとえば小規模農園、民間企業や社会福祉団体に勤務する人もいる。教会員は、大学学部卒業以上の学歴を持つ人が多い。また海外で過ごした人も多く、多文化や異文化について身近に接した人も数多くいる。メノナイト教会とかかわりのある家庭で育った人が多いが、それ以外の宗教的背景を持つ人、あるいは宗教的な家庭の出身でない人もいる。幼い子供がいる家庭の教会参加も多いが、一方で退職後、転居を契機にこの教会に来るようになった人もいる。人種やエスニシティ、性的オリエンテーションにおける多様性を重視しており、そのことはたびたび説教やそのほかの教会活動で説明され、強調される。人種的な教会員の割合としては白人が多く、それ以外の人々は少数派である。

リベラルグループの教会の多くにみられるように、メノナイト教派のルーツや基本的な教義を大切に、社会的弱者に対するサポート、人種差別の改善、平和活動等に積極的に取り組むことを奨励する教会である。多くの教会員はそのような社会活動に有給、

無給の形で教会の枠内外でかかわっている。さらにこの教会は、地域のほかのキリスト教派との連携や他の宗教団体とも連携して、よりよい社会をつくる活動にも積極的に参加している。

前述したように、リベラルグループでは教会による衣服やそのほかの制限はほとんどない。高等教育へのサポートや大学進学は奨励され、そのための金銭的な援助も教会から提供されている。また、さまざまなテクノロジーも使用しており、教会のホームページやブログは広く活用されている。礼拝での聖書朗読などの際には、紙媒体の聖書ではなく、タブレットやスマホの画面を見ながら朗読する人が多い。2020年春以降は、新型コロナウイルス感染症による対応として、オンラインによっての日曜礼拝のライブストリーム映像配信、オンラインでの会議や勉強会が開かれるようになった。この論文では、2020年3月から2022年3月までのオンラインによる教会の礼拝と勉強会での様子から考察を進めていく。

VI. キリスト教ナショナリズムとの遭遇と対応

多くのリベラルメノナイトの教会と同様に、メイプルストリート教会でも、聖書の教えを日々の生活につなげて実践していくことが強調されている。その実践は教会やメノナイト教派内だけでなく、外の社会にも向けられている。たとえば、経済的な困難に遭遇した教会員に対する金銭的な支援、ホームレスや刑務所出所者に対する支援などは、日曜礼拝で繰り返し言及され、その働きの重要性が、聖書のメッセージと関連するものとして紹介されている。

また社会的な課題への関心も高く、勉強会もたびたび開催されてきた。勉強会のフォーマットはさまざまであるが、何らかの本を取り上げながら進められることが多い。たとえば、通常の礼拝後に開催された教会学校クラスのひとつは Kendi (2019) による『How to Be an Antiracist』などの本を用いて人種問題の勉強会であった。このように、キリスト教関連以外の図書やトピックも教会員の関心事項として勉強会が開催されることがある。

1. 「未知」な存在

前述したようにアメリカにおけるキリスト教と政治とのかかわりは長い。しかしメイプルストリート教会の人々の多くは、2020年ごろから特に目につくようになったキリスト教と政治、特にナショナリズムとの関係に驚きと当惑を感じたようである。2020年ごろから新聞やテレビなどで、キリスト教の十字

架や聖書、そのほかのシンボルが特定の政策や政治家の支援の動きと共に登場する場面がたびたび登場することがあった。それらから連想されるキリスト教の姿に驚き、そのようなキリスト教の動きをどうとらえるべきか戸惑いを感じたことが彼らの会話からうかがえる。

たとえば勉強会の企画者の一人であるサラの語りはそういった当惑の様子をうかがわせるものである。メイプルストリート教会では、キリスト教ナショナリズムについての勉強会が2021年4月から5月にかけてオンラインで開かれた（以下では勉強会と記す）。

その勉強会の初回で、彼女は近年のキリスト教ナショナリズムの動きをみて、勉強会を開きたいと思ったと説明した。だが、そのような動きをどのような言葉で表現したらよいのか、そしてその勉強会としてどのような名前にしたらよいのか、なかなか良い案が思いつかなかったと話した。キリスト教保守派、キリスト教右派、福音主義派、異端的なキリスト教に関する動きなど、いろいろな候補を彼女は考えたが、そのどれも、何をもって、右派、福音主義派とするのかといった問題が残ったと語った。続けて、たとえばキリスト教を広く述べ伝える福音主義自体にはそれなりの意味があって重要性があり、実際自分も含め、福音主義者（エバンジェリカル）と呼ばれることにそんなに悪い印象を持たないと述べた。彼女はこのことから福音主義やエバンジェリカル運動といった言葉を用いるのは適切でないと感じたことを参加者に説明した。結局サラやそのほかの勉強会の開催に興味があった教会員数名と牧師との相談によって、勉強会の名前を決めたとの説明があった。（実際の名称については教会や勉強会が特定されるためここでは省略する）サラは、最終的に決めた勉強会の名前は、完全なものではなく、問題もあることもわかっていると付け加えた。しかし、と彼女は続け、名称にとらわれるよりも、今盛んになっているキリスト教的右派運動について学んだり、議論をしたりする勉強会になればと思うと語った。

サラのコメントのように、気になる動きとしてキリスト教ナショナリズムの存在を知ってはいるが、その動きをどのように表現すべきか困ってしまうといった反応は勉強会の参加者のコメントでもたびたび登場した。オンライン等の教会のイベントに参加する教会員の多くは、積極的に教会で活動している比較的信仰の篤い人々である。そういった彼らにとって、メディア等で映し出されるキリスト教ナショ

ナリズム支持者に関する報道は彼らと自分たちとの関係についてどのように考えるべきかという疑問を生じさせる。一方では、ナショナリズム的な発言をしている人々は自分たちと信仰を共にする人々でもある。しかし彼らの発言や動きの多くは、社会的弱者への支援や平和主義などを支持するメイプルストリート教会の人々とは相いれない面が多い。だからといって彼らを「問題の人たち」とひとくくりにしてしまえば、自分たちも同様に分類されてしまう恐れがある。福音主義者という言葉が持つ曖昧性と同じで、自分たちとの違いを感じつつ、彼らをどのように呼ぶのかについての戸惑いがみられる。そこからは自分たちと彼らとの微妙な関係性を感じている教会員の様子がうかがえる。

また問題は「彼ら」をどう呼ぶかという名称だけでない。その彼らが一体「誰」なのか、といった点についても、戸惑いを感じている人もいたようであった。たとえば、2022年3月にキリスト教ナショナリズムに関するセミナーが近隣の教会にて開催された。そこではメノナイト系の神学校の教員がメインのスピーカーとして登場し、メイプルストリート教会の教会員も多く参加していた。スピーカーはまず、一体現在のキリスト教ナショナリズムに賛同する人々が誰なのかとの問いを参加者に投げかけることから話を始めた。これは話題の導入として使われた面もあるが、スピーカーや聴衆、そして、一般論として、キリスト教ナショナリズムの賛同者が誰なのかが、捕らえにくかったこととも関連する。前述した Whitehead & Perry (2020) が指摘するように、キリスト教ナショナリズムに共感する人は広く存在する。しかし一方で彼らの思想や何が彼らをつなげているのかはあまりよく分からない。また彼らの言動は自分たちとは異なり、理解が難しい。勉強会やセミナーでは、そういった「未知」の彼らの存在を目の当たりにして、自分たちの知らないキリスト教信者への理解を深めようとしている教会員の姿が見られる。

このような興味や関心は、勉強会の参加者の数が通常の勉強会よりも多かったことからもうかがえる。今回の勉強会は通常の対面での開催ではなく、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため Zoom で行われた。フォーマット以外は、通常と同じく自由参加の形で日曜礼拝後に行われた。ほかの多くの勉強会の参加者は20名を越えることがあまりないのに対し、この勉強会の各回の参加者数は20名から40名ほどであった。もちろん、Zoom のフォーマットだったので参加しやすかった人もいるだろう。しかし以

前に Zoom でおこなわれた別の勉強会の参加者が 10 名から 15 名程度であったこと、そしてその前に企画された Zoom での勉強会は参加者が少なく中止になったことから、このテーマが比較的多くの教会員の興味を集めていたことがわかる。

勉強会の内容も、参加教会員の関心の高さを感じさせるようなものであった。この勉強会は、事前に勉強会のリーダー的な教会員によってトピックが決められ、各回の担当者が進行役を務める形で行われた。担当者はまずトピックについて背景を説明し、その後に参加者間で議論や意見交換をする時間が設けられた。各回のトピックには、たとえば反ユダヤ主義やシオニズム運動、アメリカの人種差別の歴史などがあり、現在のキリスト教ナショナリズムに至る歴史的、神学的背景を複数の側面からとりあげていた。各回のトピックから、キリスト教ナショナリズムの安易で単純な理解を促進するのではなく、重層的に考察しようとしていることがうかがえる。それぞれの回では、担当者がトピック関連の書物を数冊紹介しており、そこから彼らが相当な時間を費やしたことがわかる。当日にはスライドを提示したり、資料をオンラインで配布したりしながら説明する人も多くその準備にも時間を費やしていたようだ。

このような様子から、キリスト教ナショナリズムに対して関心が高く、さらにそれに対して、知識を深めたいという教会員が比較的多くいたことがうかがえる。この背景には、メイプルストリート教会員に高等教育を受けた人や教会関連機関で働いた経験を持つ人が相当数含まれ、全般的に教会員の多くが社会の動向に高い関心を持つことと関連するのかもしれない。またメイプルストリート教会員の多くが、書物や関連資料を読み考えるという作業になじみがあり、勉強会等での意見交換に慣れていることともあるだろう。しかしそれらとともに、最近のキリスト教ナショナリズムの動きが彼らの関心を寄せることだったこと、そしてその現象が、「知らない」あるいは自分たちの知っているキリスト教とは「違う」ものと感じられたことも関係する。リベラルな傾向の強いメイプルストリート教会員にとって、人種差別的な政策や先住民差別、反ユダヤ主義は、現在の自分たちの信仰の表現とは異なるものである。しかしそういった差別を助長するような傾向に対して、自分たちとは違う、知らない人による他人事として対応するのでは不十分であると感じているようである。参加者は勉強会を通じ、アメリカのキリスト教の歴史上、同様なことが何度も登場していることを認識し、そのうえでキリスト教ナショナリズムの近

年の動きを理解しようとしていた。そして自分たちにとっては相容れない考え方もかもしれないが、キリスト教のある側面として、長く存在する動きとしてとらえなおしていた。

2. 身近な出会い

このように見知らぬ存在として近年のキリスト教ナショナリズムを感じた教会員の姿が多く見られた一方、そういった立場に共感する人との出会いの体験について語る教会員も多かった。その体験話はしばしば身近なところでの出会いについてで、それらの語りからは、思いのほか身近な出会いへの戸惑いと、そこでの対応への疑問や葛藤がみられる。

毎週開かれるメイプルストリート教会の聖書勉強会に参加しているメアリーはそういった出会いの様子を語っていた教会員の一人である。メアリーは 70 代の女性で、メノナイトの家庭で育った。彼女の親戚は多くはメノナイト教会員であるが、さまざまなサブグループの人が含まれる。メノナイト教派の多様化は 1950 年ごろから徐々に進んだ (Redekop, 1998; Scott, 1996)。そのため現在はリベラルなサブグループの教会員であっても、親戚にほかのサブグループの人が含まれることはしばしばある。そのため日常的にはほかのメノナイトグループの人々とは出会わない人であっても、親戚の集まりなどで顔を合わせることもある。メアリーの話はそういった異なるメノナイトのサブグループの親戚とのやり取りについてのものであった。

ワクチン接種がアメリカで広く行われるようになった 2021 年 11 月下旬の聖書勉強会での一場面はその例である。メアリーは彼女と夫が自分たちとは異なる解釈をする親戚への対応をどうすればいいか苦慮していることを述べていた。当日の Zoom での聖書勉強会には、9 人の教会員と牧師が参加していた。聖書勉強会では、参加者が近況について語ることがしばしばある。この日、メアリーは数日前、甥の妻が新型コロナウイルスに感染したことと、そしてそのことを心配していると語った。当時のアメリカではワクチンの接種が広く推進され、少なくとも希望者は接種ができる状態であった。メイプルストリート教会でも接種可能な人はほぼ接種していた時期であった。しかし教会の外では接種はそれほど進んではいなかった。新型コロナウイルス対策のワクチン接種について、その安全性等を疑問視する人々があり、その中にはキリスト教ナショナリズムの流れに共感する人も多かった。そういった状況の中、メアリーは聖書勉強会の人々に、甥夫婦は、新型コロナ

ウイルス感染症に対するワクチン接種を拒否していると付け加え、彼らが接種をしていないのは健康上の理由ではなく、国が推奨するワクチン接種の妥当性に疑問を抱いてのことであるとも語った。その上で、ワクチン未接種者の彼らの新型コロナウイルスの感染について、メアリーは心配していることを伝えていた。感染だけでなく、彼らのワクチン接種への対応も伝えていることから、メアリーの複雑な思いが垣間見える。メアリーは甥夫婦の健康を思っているがゆえに、今回の状況がワクチン接種によって回避できたかもしれないと思っているようであった。

メアリーの甥夫婦やそのほかの親戚への対応への複雑な思いの様子は、その後の聖書勉強会でのコメントからもうかがえる。その日の勉強会では予定されていたエレミア書 29 章について話し合われた。場面は、預言者エレミアがバビロンによる支配を受けているイスラエルの民について、語りかけているところである。聖書箇所を読みながら、参加者と牧師は、エレミアがバビロンの支配が長期に及ぶこと、またさまざまな偽りの預言があるがそれに惑わされてはいけないこと、動乱の時にあっても神を信じ続けることの重要性を語っていることが参加者や牧師から指摘された。

聖書勉強会では、聖書箇所と現在の自分たちの状況を考えることがしばしばあり、この日の会話も聖書の話と現状との関連へと展開した。参加者から、現在でも正反対の解釈をする宗教的なリーダーがいること、そしてそれによって何が真実かの見方も変わってしまっているとの指摘があった。それを受け別の参加者からは、現在のそのような状態について悲しく思うというコメントや、ネガティブな現実をみつつ、オルタナティブな見方を示したエレミアのような行為は重要だといった発言があった。そういった会話の中、メアリーは知らない人が嘘を信じているのならそれを無視するのは簡単だけれども、と語り、それが家族だったら大変だと思うと述べた。自分の姪もワクチン拒否をしたりして、ほかの人の意見に耳を貸さない。そんな人とは会話をすることすら少し難しいと語った。さらに付け加えて、それにもかかわらず先日の日曜日に夫が甥夫婦と話すことができよかったですと話した。

同様の場面は、そのほかの場面でもみられた。メアリーのように、親戚や知人がワクチンを宗教的な解釈を理由に拒否していることに対する戸惑いを示す人もいれば、彼らや彼らの周りの人々の健康への配慮についてどのように考えるのか困惑していると

いう人もいた。メイブルストリート教会や教会員はワクチンを接種しない決断を尊重している。しかし教会ではワクチン接種によって重篤な状態になるリスクを減らすことができること、そして可能ならば接種をすることを推奨することがたびたびアナウンスされていた。牧師の説教や教会のニュースレターでは、ワクチン接種やそのほかの感染症拡大防止への協力は、自分だけでなく周囲の人の安全や健康に寄与でき、キリストの姿や教えに従うことにもつながる行動として語られていた。また礼拝では時折、教会員で医療従事者の人が、ワクチンを打っていない感染者で重症となったケースや感染者の増加による医療サービスのひっ迫の様子を伝えていた。そんな中で、メアリーやそのほかの教会員は、同じキリスト教信者の親戚が、キリスト教ナショナリズムの流れや不確かな情報や政治的な立場に基づき、ワクチン接種を拒んでいることを述べていた。そこでは、キリスト教ナショナリズムの共感者や自分たちとは異なった聖書解釈の人が思いのほか身近にいたことの気づきと、そしてそれに対してどのように対応すべきかとの戸惑いがみられる。

前述したキリスト教ナショナリズムについての勉強会参加者のブレットは、そういった戸惑いについてメアリーよりももう少し明確に表現している例である。ブレットは、勉強会でキリスト教右派の歴史的な流れについての回を担当した 30 代半ばの男性である。彼は勉強会のはじめに自己紹介として、自分が地域政治に積極的に参加している民主党員で、メノナイト教派ではないが福音主義的なキリスト教の家庭に育ったと語った。続けて、祖父は敬虔なキリスト教徒であるが、自分とは相いれない政治的な立場をとっていると参加者に伝えた。さらに祖父は現在のキリスト教右派運動で重要な役割を担っているとされる **National Prayer Breakfast** の参加者であったと説明を加えた。この朝食会は大統領を含めた政治家とキリスト教のリーダーが一緒に集まる会で、現在も開かれている。かつて福音主義的運動のリーダー的存在だったビリー・グラハムも参加したこの会は、宗教的右派の政治的活動が垣間見える場面の一つである (Sharlet, 2009)。ブレットは参加者に、そこに参加できる人は限られており、そういった人の中に自分の祖父がいたことを自分が知って少し驚いたことを伝え、祖父の右派的な傾向も語った。だが、ブレットは祖父とは必ずしも関係が悪いわけではないという。しかし、と彼は続け、祖父とは、移民やジェンダー、最近ではワクチンといったトピックで意見が全く合わないとも語り、祖父との関係が

複雑なものであることを伝えていた。

その後、ブレットはその日のキリスト教右派や現在のキリスト教ナショナリズムの共感者とどのように接するべきかとの議論を受けて、自分の別の体験を参加者に語った。彼は感謝祭で一緒に食事をする関係の人とでは、どのように接するのには特に難しいと語った。そして最近、自分はいとこをフェイスブックの友達から解除したことを伝え、それが果たしてよい対応だったのか、自分ではよく分からないと述べた。そこからは彼の心の迷いも見られたが、ブレットは続けて、ワクチン陰謀説を支持し、拡散しようとしている人とは友達登録を継続できなかったといい、自分の体験を振り返っていた。

ブレットやメアリーの例から、キリスト教ナショナリズムが教会員の身近にも存在することへの気づきや対応の様子がうかがえる。彼らがほかの教会員にわざわざ語っている様子から、その出会いは、少し驚きを感じさせるものだったようである。親戚の宗教的な解釈や政治的な傾向は、以前から少しは知っていたかもしれない。しかしブレットの語りにもあるように、親戚の考え方を、現在のアメリカ社会でのキリスト教ナショナリズムの大きな流れとの位置づけの中で、改めて認識したようであった。また、メアリーの心配や懸念、ブレットのいとこへの対応のように、その出会いはそうした身近にいた彼らの存在と自分たちとの関係を考えさせる機会となった様子である。

ブレットやメアリーは代表的な例で、そのほかの場面でも同じようなやり取りがみられた。そこから、教会員の中には、一方ではキリスト教ナショナリズムの動きの大きさや広がりには驚き、自分たちとは異なるキリスト教として感じた人が少なからずいたことがわかる。他方でそのような自分たちとは違う解釈をし、時には理解に苦しむ立場をとる人たちが遠い存在ではなく、身近な存在であることへの気づきと彼らとの関係をどのように保つのかへの戸惑いが見られた。

3. 関係性構築へのまなざしと課題

メイプルストリート教会員にとって、ナショナリズム的なキリスト教の立場は、相容れないものである場合が多い。だが、より公平で平和な社会を目指すメイプルストリート教会の教会員にとっては、彼らを単に疎外し、対立するものとして対応するだけでは十分ではない。とはいえ、キリスト教ナショナリズム立場に共感していく人とどのように付き合っていくかは難しい問題でもある。勉強会等のやりと

りからは、メイプルストリート教会の人々が、自分たちの立場とは異なったキリスト教信者の人に対して、なんらかのつながりや共通点を見つけながら、関わり合いを持ちつつ立場の違いを考えていこうと模索していることがうかがえる。

たとえば、キリスト教ナショナリズムについての勉強会では、そういった考えに対して共感してしまう傾向は、ひょっとしたら自分たちにもあるかもしれないと感じさせるような発言がしばしばあった。その一つの例は、キリスト教右派と権威主義について取り扱った回である。そこではキリスト教会や教徒が時に、自分たちののぞむ社会の実現のため、自分たちの意見への賛同を強要したりする権威主義に陥ってしまう傾向を歴史的に振り返りながら話し合いがもたれた。

当日の担当者のドナルドは、キリスト教と権威主義との関係について、悪い点と良い点とをバランスを取りながら振り返り行った。たとえば権威主義の例としては、白人の男性中心の教会でのリーダーシップ体系や、貧困等の社会問題の改善を目指した社会的福音運動などをあげていた。ドナルドはそうすることで、キリスト教徒や教会は、良くも悪くも自分たちの信条が正しいと思ってしまうと、権威主義となりがちであることを強調した。

ドナルドはそこで話をやめず、メノナイト教会にもその傾向があると話を進めた。彼はメノナイト教会の運営する大学をめぐって繰り返された聖書解釈論争について触れた。メノナイト教会が関係する大学レベルの高等教育機関はいくつかある。先にも述べたが、そういった教育機関は、基本的にリベラルグループのメノナイト教会や教会員の支援により誕生し、運営されてきた。しかしリベラルメノナイトの中でも対立はある。その対立に大学も影響をしばしば受けてきた。同じメノナイト系の大学といえども、どのようにメノナイトの歴史や聖書の教えを理解し、教育に反映させるかは各大学の状況によって異なる。それが時に、大学の内外の支援者やメノナイト教会との大きな対立へと発展することがある。ドナルドは、大学の一時的な閉鎖や教授陣の交代などが起こった1920年から1930年ごろ様子について触れ、権威を巡る対立や一定の解釈への服従が強調されたことがメノナイト教会でも起こったことについて述べた。さらに、当時の様子を描いた風刺画を見せながら、「正しさ」を求めるあまり、盲目的になったり、権威を使い、服従を強要してしまったりすることがあると述べ、キリスト教右派にとっても左派にとっても、その傾向を認識することが必要で、

対話が必要ではないかと語った。

ただその実践となると、簡単ではない。メイブルストリート教会のように、キリストの姿や教えに基づき、より公平な社会を目指して進む努力をしている人には、その重要性を他者にも伝え、共有してほしいと思いがちである。またそれ故、自分たちのビジョンとは異なる、キリスト教ナショナリズムの共感者の主張は受け入れがたい時が多い。ドナルド自身にとってもこの点は継続的な課題として残っていることは、その後の勉強会参加者のディスカッションの様子からもうかがえた。ドナルドの発表の後、数人が、当時のトランプ大統領や支持者が、「真実 (Truth)」という概念を都合の良いように妥協の産物として考えているのではとのコメントや、若者は真実や権威についてどのように思っているのかとのコメントがあった。またその後にはキリスト教の「真実」を信じる人はその実践を行動に移す努力をするので、必然的に権威主義の傾向があるのではという疑問の声があがった。これに対しドナルドは、自分自身、今回の発表はある意味、不十分なところがあると述べ、歴史的に見るとリベラルも保守派もその傾向があると思えると発言していた。

とはいえ、教会員の中では自分たちが正しいと思うあまり、ほかの人を追いやってしまっていないのかと気を配ったり、対話をしようとしたりしている様子がいろいろな場面でみられた。それは先述したメアリーやブレットのコメントにも見られた。メアリーは当初のキリスト教ナショナリズムの流れに共感する甥や姪の話の後も、彼らについてほかの教会員とたびたび話していた。そこでは、夫が甥と電話で話すことが出来たこと、メアリーが姪とキリスト教集会に共に参加した話などが語られた。そして意見の相違はあるものの何らかの対話をする事ができていることを感謝の気持ちを込めて聖書勉強会の参加者に報告していた。またブレットも、たびたび祖父との関係は宗教観の違いがあるものの保たれていることを述べていた。

しかし、それ以上のステップとなるとなかなか難しい。後の勉強会では、現在のキリスト教ナショナリズムの支持者が政治家や権力者との関係を深め、政治や政策等にいかに関与を与えつつあるのかについての発表があった。当日の担当者のポーラは彼女が読んだ複数の研究者による書籍などに言及しながら、現在のキリスト教ナショナリズムの影響がかなり広い場面で見られること、そしてそれは必ずしもキリスト教の理念を基礎としているのではなく、一部のリーダーによる政治的な動きと関連している場

合が多いとの話をした。その発表をうけ、ポーラやその他の参加者は、裁判所判事の任命の動向や、教会員の個人情報を利用して投票を呼びかけたりする組織があることなどを話し合った。その動きに教会員の人々が着目していることから、そういった行為の危険性について参加者の多くが認識しているようだった。だが、それに対して具体的にどのように対処すればいいのかについて、なかなかいい対応や対策がなく、模索の途中であるようであった。参加者の何人かは、先のメアリーやブレットのように、まずキリスト教ナショナリズムの共感者の人たちと共通に話し合える話題を持ち、ある程度の関係性ができた後に、それぞれの観点を理解しようとするのはどうかと提案した。これに対し、それだけではなくもっと踏み込んだ行動を取るほうがよいという人もいた。メノナイト教会組織の中には、時に政府や関係機関に平和活動等について情報提供をしているものもある。だが参加者の中からは、それよりももう少し積極的な動きが必要なのではないかという意見がでた。また中絶に対する法解釈の動きや民主主義の根幹である選挙や投票に関わる問題については、積極的に意見を表明するほうがいいのではないかという意見がでた。一方、そういった対応に慎重さを求めるコメントもあった。そこでは、同じメノナイト教会や学校等の教会関連機関にもさまざまな意見を持つ人がいること、またメノナイト系の学校ではほかのキリスト教徒、特に保守的で現在のキリスト教ナショナリズムの影響を受けている人もいることの指摘があった。そしてそういった人の存在は、教会や学校の運営にとって重要で、意見の違いを主張し、対立してしまうだけでは、事態はよくなるまいとの声があった。話し合える関係性をつくるのが第一歩ではあるが、そこからどのように折り合いを見つけていくのかについては、意見がさまざまであり模索中の様子である。

先に述べた Zigon (2008) のモラルティエーの三つの局面と関連させると、メイブルストリート教会の人たちの葛藤への対処の困難さが浮かび上がってくる。キリスト教ナショナリズム共感者やその政策は、Zigon による三つの局面のひとつである教会の制度や規範によって明確に対応できるものではない。そういったモラルティエーに関する判断は Zigon の残りの二つの局面、すなわち制度的には確立してはいないが人々の言説として表現されるもの、あるいは必ずしも言語化されていないが習慣などとして身体化された場面で行われる。しかし何が主な言説なのか、そしてどんな事柄が身体化されるのかは、所属する

教会や教会員によるところが多い。現在のアメリカのメノナイト教派の各教会内では、似たような考えや価値観の人が多く (Naka, 2011)。しかし、教派自体は多様でさまざまな親戚や知人が教会員の周りにはいる。また近隣の住人など広く周りの人たちも含めると、異なる考えの人との出会いの可能性は多い。そんな中、どのように一人の信者として、また教会コミュニティとして、あるべき対応の判断を模索していくのかは簡単ではない。多様性を重んじるメイプルストリート教会のようなリベラルな教会ではなおさら難しい課題である。

VII. おわりに

この論文ではメイプルストリート教会員の事例をもとに、近年のアメリカのキリスト教ナショナリズムへの対応の様子を考察してきた。そこでは、同じキリスト教徒とはいえ、異なる解釈、政治的立場に共感する人たちにどのように対応するのかへの困惑や模索の様子がみられた。そしてその模索は、Mattingly (2014) や Kleinman (2007) の研究に見られるように、ある種の非日常的な状況下であるパンデミックや政治的混乱や対立の中でおこなわれた。

教会員の多くは、特定の人種や経済的、社会的弱者の排除の傾向などがみられるナショナリズムの流れは受け入れがたいと感じていた。教会員はキリストの姿に倣い、より開かれた教会やより公平な社会への努力を重要視している。その彼らにとっては、特定のグループの利益や立場を擁護するナショナリズム共感者の言動や行為は、同じ信仰を持つものであっても、あるいはそれ故に理解に苦しんでいる様子だった。しかし一方でその状態を同じキリスト教の信仰者としてただ静観するわけにはいかないとの意見もみられた。加えてナショナリズム共感者が、親戚といった身近にも存在していることによって、彼らの対応の模索はさらに難しいものとなっていた。

Whitehead & Perry (2020) が指摘するように、現在のキリスト教ナショナリズムの支持者や共感者が特定の教派や教会のみに限定されるのではないとするならば、彼らとその動きに反対の立場のキリスト教徒との出会いもさまざまな教会で見られると考えられる。その点でメイプルストリート教会の人々の葛藤はある程度、キリスト教リベラル派の人々の体験と重なる面があるだろう。またキリスト教徒に限らず、政治的な立場が違う他者は、時として自分たちと何らかのつながりがある人々である場合もある。そしてそういった出会いにどのように接していくのかはさまざまな対立が激しくなっているアメリカ社

会で広く共有されている課題の一つともいえる。メイプルストリート教会の事例は、そういった対応の模索の一例ともいえる。そしてそのような模索は困難で、継続的なものである。

メイプルストリート教会員の人たちの多くは、引き続き公平で、平和な社会を目指しつつ、さまざまな働きかけをしている。そして時にフラストレーションを感じたり、疲労感に圧倒されてしまったりすることもある。メイプルストリート教会の礼拝やその他の場面では時折、疲れやフラストレーションを受け入れながら、このような取り組みに対する困難で継続的な歩みについての語りがみられる。たとえば対面での礼拝が再開された 2021 年 6 月下旬の礼拝では石とろうそくの灯を使って、それまでの喜び、悲しみ、嘆きについて振り返る時間がもたれた。そしてそのうえで、神様が自分たちの過去、現在、未来に共にいてくださることを心にとめるようにとの呼びかけがあった。そういった長期的な展望を必要とするものの一つが、キリスト教ナショナリズムやその共感者との関係作りなのかもしれない。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 20K01218 による研究成果の一部である。この調査にご協力くださった関係者の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 英語文献
- Bjork-James, S. (2021). *The Divine Institution: White evangelicalism's politics of the family*. Rutgers University Press.
- Butler, A. (2021). *White Evangelical Racism: The politics of morality in America*. University of North Carolina Press.
- Du Mez, K. K. (2020). *Jesus and John Wayne: How white evangelicals corrupted a faith and fractured a nation*. Liveright.
- Kendi, I. X. (2019). *How to Be an Antiracist*. London: Bodley Head.
- Kleinman, A. (2007). *What Really Matters: Living a moral life amidst uncertainty and danger*. Oxford University Press.
- Mattingly, C. (2014). *Moral Laboratories: Family peril and the struggle for a good life*. University of California Press.
- Naka, T. (2008). Faith at work: Mennonite beliefs and occupations. *Ethnology*, 47(4), 271–289.
- _____. (2011). The spirit of giving: Mennonite narratives about charitable contributions. *Culture and Religion*, 12 (3),

317-338.

- Putnam, R. D. & Campbell, D. E. (2010). *American Grace: How religion divides and unites us*. Simon & Schuster.
- Redekop, C.W. (1989). *Mennonite Society*. Johns Hopkins University Press.
- . (1998). *Leaving Anabaptism: From evangelical Mennonite Brethren to fellowship of evangelical Bible churches*. Herald Press.
- Scott, S. (1996). *An Introduction to Old Order and Conservative Mennonite Groups*. Good Books.
- Sharlet, J. (2009). *The Family: The secret fundamentalism at the heart of American power*. Harper Perennial.
- Stewart, K. (2020). *The Power Worshipers: Inside the*

dangerous rise of religious nationalism. Bloomsbury Publishing.

- Whitehead, A. L & Perry, S. L. (2020). *Taking America Back for God: Christian nationalism in the United States*. Oxford University Press.
- Zigon, J. (2008). *Morality: An anthropological perspective*. Berg Publishers.

日本語文献

- 神原ゆうこ (2021) 「市民活動という政治の場における道徳/倫理とその実践—文化人類学における「倫理的転回」の議論をふまえて」『文化人類学』86(2):230-249.

